

## シンポジウム

### テーマ「共に生きる 絵本にできること」

パネリスト：攪上久子氏（世界のバリアフリー絵本展実行委員長）

：古瀬敏氏（静岡文化芸術大学教授）

：池上重弘氏（静岡文化芸術大学教授）

：森俊太氏（静岡文化芸術大学教授）

：武田美穂氏（絵本作家）

司会 ただいまから、シンポジウム「共に生きる 絵本にできること」を始めます。先ほどの実行委員長のあいさつにもありましたが、本学はユニバーサルデザイン、多文化共生を理念として掲げており、その流れがあって、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール」を2010年より4回にわたって開催しております。

本日のパネリストの攪上久子先生は、第1回目のユニバーサルデザイン絵本コンクール2010で審査委員長をお務めくださいました。攪上先生は世界のバリアフリー絵本展実行委員長としてご活躍されています。

また、絵本作家の武田美穂先生も、ユニバーサルデザイン絵本コンクール2010に特別審査委員としてご参加くださいました。まったく面識がなかったのですがお願いいたしましたところ、快くお受けいただきまして、ご多忙の中、審査委員会、表彰式と、東京から本学までお越しくございました。ありがとうございます。

本学からは、デザイン学部空間造形学科でユニバーサルデザインの専門家である古瀬敏教授、文化政策学部国際文化学科の池上重弘教授、文化政策学部文化政策学科の森俊太教授がパネリストとして参加しております。池上先生は、多文化共生という視点で、森先生社会学の授業の中での実例などをお話しくくださる予定です。

まず、パネリストお一人ずつに、10～15分程度の時間でご報告をいただき、そのあと、パネリストの方の間でまた会場からのご質問、ご意見に答える形で、進行していきたいと思っております。

## 報告 1

### 「絵本が向ける眼差しは共に生きる社会のバロメーター」

攪上久子氏（世界のバリアフリー絵本展実行委員長）

攪上 こんにちは。攪上と申します。静岡文化芸術大学が主催しておりますユニバーサルデザイン絵本コンクールの作品は毎年見に来させていただいています。とても楽しくて、心がわくわくするような作品ばかりで、今年もコンクールがあるようなので楽しみにしています。

私は、「世界のバリアフリー絵本展」というタイトルの全国巡回絵本展を10年間実行してきました。内容は2年に1回更新していますが、今までに120カ所ぐらい全国を巡回して展示をしてまいりました。ここに展示されている図書は、子どもの本の世界のネットワークIBBY（International Board on Books for Young People：国際児童図書評議会）の障害児図書資料センターが、2年に1度、世界各国からの公募を通して選考しているアウトスタンディングブック（Outstanding Book：推薦図書）から成り立っています。

IBBY障害児図書資料センターは北欧のノルウェーで設立されたので、北欧のノーマライゼーション理念——「ノーマライゼーション」というのは1960年代に北欧諸国から起きた社会理念の一つで、「障害があることで特別に区別されることなく社会生活を共にしていくのがノーマルな社会のあり方だ」という考え方です。それと、IBBYという団体は戦後ドイツで設立された団体ですが、人間がさまざまに心の中に引いたりする線（border）、一番は国境だと思いますが、国境があるから戦争や紛争が起きる、それから、障害というところから考えると、障害がある、ないということで分かれてしまう。そういう、人が心の中に引いてしまうさまざまな線を、子どもの本は越えていく力がある。これが設立の大きな理念です。この北欧のノーマライゼーション理念と、IBBYの持つ、「子どもの本は線を越えていく」という理念を精神的な柱にして選書されているコレクションです。つまり、この展示会は、それらの理念が具現化されているもの、と思っています。

この10年間、実行しながらさまざまな本を見てきまして、確実に、世界の人々の工夫と知恵は、それまで絵本の鏡に映していなかった、映してこなかった子どもたちを映し出し、その窓から向ける子どもたちへの眼差しも広げてきていると実感しています。

絵本にあるバリアは、障害のある子どもたちの側にあるのではなくて、絵本の側にあると考えてきました。そのバリアを打ち破っていくことは、決して一度にできるものではなくて、たくさんの人たちのいろいろな葛藤と努力が、壁を壊して少しずつ織物のように新しい試みを紡いでいっているのを、この展示会に並ぶ絵本を見ながら実感してまいりました。線が引かれている世界ですので、ときには対立も起きるんですね。ユニバーサルとかデザインということは、葛藤して、止揚していく、その過程があって生まれていくものではないかなと私は絵本を見て考えています。

世界から寄せられる絵本が、数年後に影響し合って、ミックスして先に進んでいる歩みも見てまいりました。また、この展示会の絵本は、世界各国から集められておりますので、それぞれその国の社会の状況だったり、文化の状況だったり、母語とか、さまざまな違いがある国から集められています。障害に対してのバリアを越える絵本は、そうした異文化を超える力があるのではないかなということも感じてまいりました。

ほんの少しですが、展示風景を見ていただければと思います。スライドは佛教大学での展示です。次

のライドは東京学芸大学で行った展示会の様子です。展示会場も全部学生がデザインしてくださいました。

さて、皆さん、「子ども」という言葉を聞いて、皆さんの頭の中にどんな子どもたちがイメージされるのでしょうか。先日たまたま浜田佳子さんという絵本作家さんと、ほんのちょっとですがお話をした時、浜田さんがこんなことを語ってくださいました。浜田さんは、ライドに小さく画像がありますが、『ベカンの木のぼったよ』という絵本の絵を描かれています。この絵本には肢体不自由の「りんちゃん」というお子さんが出てきます。ストーリーは、青木（道代）ご夫妻という全盲の牧師ご夫妻が運営している、インクルージョン保育を実行している保育園での実話を基に作られています。浜田さんはりんちゃんのモデルになられたお子さんと何度もお会いしてこの絵本を制作されたと伺っています。この絵本を作ったあと、浜田さんの中にりんちゃんが住み着いてしまったので、その後、浜田さんが子どもの絵を描くときにどうしてもりんちゃんが出てきてしまうというお話をしてくださいました。

このエピソードは、共に生きている社会の大事さを物語る一つのエピソードかなと思います。日本の社会、特に学校教育は、残念ですが、障害のある子どもたちや異文化の子どもたちをインクルードしてきた社会ではありません。日本でユニバーサルな絵本をつくっていくには、もっともっと、共に生きていく社会の努力がなされなければならないといえる、と考えています。

ここで、本当にざっとですが、もっと絵本がその眼差しを向けてほしい子どもたちが実際日本にどのぐらいいるのかなということをお話しさせていただきます。

実は、障害児数とかそういうのをカウントするのは実際にはとても難しいことです。幸か不幸か、日本はインクルードな教育ではなくて、まだ分離教育体制のほうが強いので、特別な学校に在籍している子ども数ということで皆さんにお伝えします。ですからトータルな数ではないのですが、この数から想像していただけるといいかなと思います。大ざっぱですが、現在特別支援学校に在籍している、特別な配慮を必要とする子どもたちは、全体からすると1%に満たない数です。特別支援学校のもうちょっと細かい内訳を、これも本当に大ざっぱな数ですがお伝えいたします。視覚障害、見ることに困難がある子どもたちが約3,300人、聴覚障害が6,300人、知的障害が73,000人、肢体不自由が13,000人、病弱が2,700人、重複障害が23,000人、おおよそですが、このぐらいの割合で子どもたちが今日本で暮らしております。

普通学級の中にも、字を読んだり、何かを見ることにちょっと支援を必要とする子どもたちが6.5%ぐらいは在籍しているのではないかと、という文科省の基本調査もあります。

それから、これはあとでご報告してくださる先生のほうが詳しい内容ですが、障害ということではなく、母語や文化が違う子どもたちが日本でどのぐらい暮らしているのか。外国籍で、母語が日本語でない子どもたちが28,575人、日本国籍で、母語が日本語でない子どもたちが4,895人。絵本のことを考えてみますと、母語というのはとても大事な一つの視点になりますので、母語ということでカウントをしてみました。ちなみに静岡県は、間違っていれば、日本の中で2番目にこうした子どもたちが多く暮らしている県だと伺っています。

さて、また世界のバリアフリー絵本展の展示会のお話に戻させていただきます。IBBYは、この展示会のための本を世界から公募するのに三つのカテゴリーから公募します。

一つ目は、スライドの真ん中に書いてありますように、例えば目が見えない子どもたち、聴覚障害から母語が手話の子どもたち、ページがめくりにくい子どもたち、理解がゆっくりの子どもたち、それぞれそうしたことに対する配慮を加えた本——「forの本」と呼んでいます。

そういう本だけでなく、もう一つ大きなカテゴリーに、「aboutの本」と呼んでいます。そういう子どもたちが描かれているような絵本。そういう障害について、ストーリーの中で説明するというか、そういうことへの理解を深めるための本というカテゴリーがもう一つあります。

そして、大事なカテゴリーとして、ずっと欠かさずにこのカテゴリーの中から本を見つけ出す努力をしてきている「一般絵本のカテゴリー」があります。この一般絵本のカテゴリーがとても大事だと考えます。

子どもたちは、自分たちを特別な扱いにして特別な本を与えられることよりも、普通に街の本屋さんや図書館に行ったら自分の楽しめる本があるという社会になってほしいと望んでいます。「ライトブック (Right Book)」という言葉を使ってきました。「権利として」というのもありますが、その子たちにとってふさわしいというか、正しいというか、そういうような意味も込めて、ライトブックがある社会が、共に生きる社会、ユニバーサルな社会、ノーマライゼーションが実現している社会、と言えるのではないかと考えています。

先ほどの三つのカテゴリーを、ちょっと絵本を通して示してみたいと思います。ロービジョンだったり、見え方に少し特性がある子どもたちがいます。日本で、こういう子どもたちが登場するとか、そういう子どもたちが描かれている本は、実は探してみるとほとんどないのです。つい先日、11日にこの絵本が出版されました。(『わたしのすてきなたびする目』作:Kostecki-Shaw, Jenny Sue 訳:美馬しようこ 出版社:偕成社)これは、私たちの世界のバリアフリー絵本展の展示本から翻訳された本です。もちろんこの1冊で、ロービジョンだったり、見え方に特性のある子どもたちのことがすべて分かるわけでもありません。でも、一つはそういう子どもたちを理解するための絵本があります。

そして、この絵本はスイスの絵本です。(『Leo deckt den Tisch』(レオのおてつだい)文:Linder, Christin Stillhart, Regula 絵:Berüter, Gabi 出版社:Edition Bentheim)どのぐらい先までこの絵が見えますか。後ろのほうで見える人は手を上げていただけますか。後ろから3列目ぐらいの方でも手が上がっています。これは、見え方に特性がある子ども、少し見ることに困難さを持っている子どもたちのために——「for」の本ですね——作られた本です。中を2、3ページ見てみますと、すべて絵で描かれています(文字はありません)。かなり遠くからでも絵が見えると思います。こういう特別な配慮のある本のことを知ったうえで本屋さんや図書館で本を探してみると、こういう本を見つけます。(『どんどこどん』作:和歌山静子 出版社:福音館書店)これは日本の出版社から出ている普通の絵本です。

さっきお話ししたように、スイスで作られたような絵本と同じような要素を見いだせる本だとしても、それですべてのロービジョンの子どもたち、見え方にちょっと特性のある子どもたちにとって、すべてよいかというと、障害は多様ですので、そういうわけではないのですが、それでも普通に作られている絵本よりは、こういう本を見いだしてあげることで、より自分にとって楽しめる絵本を手渡してあげることはできるのかなと思います。これは普通に売っている本です。時間が少なくなりましたので、具体的なことは明日のラウンドテーブルにつなげたいと思っています。

そうしたたくさん本を見てきて、いわゆるユニバーサルデザインの絵本とかバリアフリーになっている絵本の方向は三つぐらいあるのかなと考えています。

一つは、点字や、手話や、手話にもさまざまなつけ方があります。現在はDVDが多くなっています。そして絵文字ですね。こういうような特別なものを加えていく方法。

二つ目は、表現方法を変える。それは見る絵を触る絵にするとか、におう絵にするとか、音で絵を表すとかいろいろありますが、今日は一つだけ実物を持ってきました。『あおくんときいろちゃん』という皆さんもとてもよく知っている絵本です。こちらは普通の絵本です。こちらが絵の表現を触れる絵に変えてある本です。( さわる絵本『Petit-Blue et Petit-Jaune』作:レオ・レオニ 出版社: Les Doigts Qui Rêvent (フランス)) あおくんときいろちゃんという、見て色が違う登場人物を、触覚を変えて、レース編みではないですが、ちょっと編み方を変えたものにしてあります。あとでまたどこかでご覧になっていただけるといいかなと思います。

あおくんときいろちゃんが抱き合うと緑色になるというストーリーです。その部分は、あおくんの織り方ときいろちゃんの織り方がミックスされたような織り方で表現されています。こういうふうに表示を変える方向。今日、つくしんぼさんの実演がありました。つくしんぼさんも日々本当にたくさんこういう布の絵本を作ってくださいしています。布の絵本も、こうした表現を変えている一つの絵本なのかなと思います。布の絵本のことだけを話してもすごくいろいろな試みがあります。

今までの、表現を変えたり、配慮を加える方向は、どちらかというとい絵本がとても複雑になる感じがします。「え? こういう本もあるの? こういう絵本も絵本なの? 初めてこういう絵本を見たわ」という感想をいただくような絵本です。

もう一つ、一見地味ですが、IBBYのカテゴリーの中に、「Easy-to-Read」というカテゴリーもあります。絵本は多分、もともとユニバーサルデザインなものだと思うんですね。絵本の原点も多分いろいろあると思いますが、一つは、私はメキシコに暮らしていたことがあります。中南米の悲惨な民族の歴史を、字の分からない人たちにも伝えたいということで、絵で伝えるということがメキシコの中では社会的な文化としてすごく定着しています。立派な壁画がまちの中で見られますが、それは、文字の見えない人たちにも絵の力でいろいろなことを伝えてきています。絵本の中にも、絵でお話を補っていいこうというような力があるわけで、より絵本の原点に戻ってみる。赤ちゃん絵本を思い浮かべていただくと、赤ちゃん絵本は、多分どの文化圏の赤ちゃんでも笑って見てくれたり、色もはっきり見えると思いますし、どの世代の人にも分かりにくいということはないと思うんですね。そういうような一つシンプルさにもう一回戻していくような方向も一つあるのかなと考えています。

ラウンドテーブルでは、この辺の具体的な本、それから、日本の取り組みのことにも少し触れられたらと思っています。私の話はここで終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございました。

## 報告2

### 「絵本とユニバーサルデザイン：中身と伝え方と」

古瀬敏氏（静岡文化芸術大学教授）

古瀬 続きまして、私、古瀬から話をさせていただきます。タイトルは、「絵本とユニバーサルデザイン：中身と伝え方と」としましたが、最初に、ユニバーサルデザインとバリアフリーデザインの違いとか、似ているようで決定的に違う部分があるので、ちょっとそれをお話ししたいと思います。

ユニバーサルデザインというのは誰もが使い手であって、使えない人が出るのはおかしい、という主張です。これが一般に主張されるようになったのは、実は建築関係です。なぜかという、特に、大学もそうですが、誰でも使うことができるはずの公共建築物では、普通の人用と、例えば車いす利用者用が別というのはあり得ない。一つで全員がカバーされるべき、ということになります。端的に言えば、入口が別になっていて、特に、「車いすは裏から回ってください」というのも本来はおかしい。この大学はそういうかたちではなくて、誰でもおしゃべりしながら、そのまま意識せずに入れるようになっていますが、そういうふうになっているべき、ということです。

ですから、バリアフリーデザインと異なって、障害があるということをごとさら言い立てていない。できる限りすべての人のため。実はそうなっていて当たり前のはずですが、現実にはけっこう難しいというのをご存じのとおりです。少し古い建物ですと、車いすの入口は別になっている。それも相当苦労して別にしていうことがあります。

ところが、特定の利用者個人の立場からしますと、こういう公共建築物とは違った場面では、一つで全員をカバーするという戦略が最適ではないことが一般的です。例えば製品なんかですと、自分の手の大きさを操作しやすい寸法が決まってくるので、全員が同じものをあてがわれて使いやすいかどうかという、必ずしもそうではない。本なんかもそうですし、サービスもその人に合わせてカスタマイズされたものがあつたほうがいいこともあります。ですから、**one design fits for all**（一つのもので全員を満足）ということではうまくいかない、ということになります。

ユニバーサルデザインを標榜して、障害者のみをターゲットにするわけではない。要するに、「すべての人のために」といってユニバーサルデザインといいますが、実質的にはそのバリアフリーデザインが前面に出て来ざるを得ない、ということもあります。

ただ、「バリアフリーデザイン」という用語を使いますと「バリアを取り除く」というわけですが、どうしても、「障害がある、それに対して利用を妨げるバリアがあつて」、あるいは、「障害を持っていることで不都合が生じて」というように、障害の存在が意識されざるを得ません。

障害の存在を意識しなければいけないというのは、実は私なんかは非常に嫌で、もともと私が研究を始めたのは、建築物の使い勝手、安全性ということです。私は団塊の世代ですが、団塊の世代が高齢期になったときに発生するに違いない不都合をあらかじめ取り除いておく、そういう不都合を建築に組み込ませない、ということから始めたものですから、私自身は障害の存在ということとは縁のないところから研究を始めてユニバーサルデザインにたどり着いているので、ユニバーサルデザインが障害という概念を意図的に前に出していない、ということがよく分かりますが、現実には、バリアフリーデザイン、障害がある、ということをごとさら意識せざるを得ない、ということはあるわけです。

ただ、どうしてもそここのところで、じゃあといって障害の有無で議論がされることになると、障害が

ない人は通常は直感的に「私には関係ない」と思ってしまうので、それをなんとか排除したかたち、その概念の対立がないかたちで説明ができたらいいなとずっと考えているわけです。

たまたまヨーロッパでは、さっきノーマライゼーションという言葉が使われましたが、結果として当たり前になっている、当たり前に使えなければいけない、使えない人が出てはいけない、というところを最終目標として、排除されないこと、エクスクルードされないことということで、インクルード、その人も区分線の向こう側ではなくてこちら側に結果としているようになっていなければいけない、という概念が主張されていました。それを「インクルーシブデザイン（包摂デザイン）」というわけです。

私個人は、実はこの単語のほうが少なくとも「バリアフリーデザイン」よりはずっといいと思う。「ユニバーサルデザイン」という単語を使うか、あるいは「インクルーシブデザイン」を使いたいと思います。構築環境、いわゆる **built environment**、建物とか都市の環境というかたちで、人間がつくった環境としての構築環境以外のもののデザインの文脈では、多分この「インクルーシブデザイン」という言葉が一番説明しやすいのではないかなと個人的には思っています。

では絵本は、ということですが、初めて本に出会う子どもから上は年齢制限なし、とずっと言われているわけですが、実際には絵本を使って何をどうやって伝えるのか。「何を」というのは中身です。「どうやって」というのは手段です。メッセージの中身ですが、「見るだけで楽しいもの」ということで絵本なのか、それとも、「伝えるメッセージ性を持っているものなのか」ということがあります。

見るだけで楽しいものというのは視覚情報に依存する割合が必然的に大きいわけです。そうすると、視覚に頼れないと楽しみは共有できないのだろうか、ということになりますから、先ほどのお話で言えば「for」、障害を持った人でも楽しめるというかたちで、例えば代替としての触覚、触る絵本、においが出る絵本、音が出る絵本もあります。基本的には、これが点字だったり、レリーフだったり、あるいは布などの素材感ということで伝えるというふうになっているわけです。これはどうしても障害ということを意識したかたちでの作られ方が主になります。

では、伝えるメッセージがある場合にはどうなのか。それは、ある意味では、理解できる年齢まで達しないとメッセージは伝わらない。少なくともそれより手前はそのメッセージが伝わらなくてもやむを得ない、ということがあります。もう一つは文化的背景。文化的背景を共有していないと、実はメッセージがきちんと伝わらないということもあります。それ以外は、伝えられればそのまま伝わる、ということですが、それを絵本という形にすることは一つの形態に過ぎないのだろうか。ほかの形があるのをたまたま絵本ということをやっているのかなというふうに考えられます。その場合には、絵で伝え切れない部分を文字に訴えるということも可能であろう。音が出る絵本とかそういうかたち、あるいは読み上げてくれるというのがあり得るかなと思います。

たまたま、われわれはこの大学でユニバーサルデザインの講義をしています。いわゆる多様性について、人と違っていることを説明するときこの絵を同僚の教員が使います。これは、ディック・ブルーナ (Dick Bruna) のミッフィーちゃんの絵本シリーズの『うさこちゃんとたれみみくん』という本です。ほかのウサギの耳は全部両方ぴんと立っていますが、このたれみみくんだけは片耳が折れていて、要するにほかのウサギと違う。人間で言えば、形としてほかの人と違うところが見えている。これが障害であるかどうかというのは、実はよく分からない。ことによると、耳が折れたウサギは音を立体的に聞き取りにくいということが起こり得るのかもしれませんが、人間の立場から言うとあまりよく分からない。でも、形が違うということが一つのメッセージとして含まれていて、違っていても同じウサギだよということが伝わるわけです。こういうメッセージの伝え方が、非常にシンプルなことでできるのが

絵本の一番いいところかなと私は思います。取りあえず以上です。(拍手)



### 報告 3

#### 「日系ブラジル人移住第2世代が托す“バトン”としてのUD絵本」

池上重弘氏（静岡文化芸術大学）

池上 3番目のプレゼンターであります、静岡文化芸術大学の池上重弘と申します。先ほどまでのお二人が、どちらかという概念的な話であったのに対して、私はものすごく個別具体的な、しかし、ある意味、浜松だから、私どもの静岡文化芸術大学だからできるユニバーサルデザイン絵本の使い方について、今年度、今まさに進んでいる取り組みをご紹介したいと思っております。「日系ブラジル人移住第2世代が托す“バトン”としてのUD絵本」という報告タイトルの中にある「バトン」という言葉の意味を皆さんにお伝えするのが今日の私の発表のポイントになります。

この学会は絵本学会ですので、日本に暮らす外国人の状況について必ずしも皆さんは詳しくないかもしれませんが、そこで、概略をまず把握するところから始めましょう。今から23年前の1990年に、外国の方を日本に受け入れる法律、略して入管法（入国管理法）が改正されました。ごく大ざっぱに言うと、日系人は3世まで日本に入国できる、そして、就労に制限がないという法律の改正がありました。その結果、ブラジルやペルーなど、当時経済的に困難な状況にあった南米の国からたくさんの日系人がやってまいりました。1989年に約100万人だった日本の外国人は、20年後の2009年には200万人を超えています。

このあと、リーマンショック等々がありまして、現在日本の外国籍人口は若干減少していますが、それでも200万人を超える外国人が住んでいます。その数のイメージは、日本の都道府県で言うと、長野県とか宮城県にほぼ匹敵する人口規模です。

その人たちの在留資格、つまり、どういう資格で日本に住んでいるかというのを見てみますと、実に半分近くが「永住者」であります。文字どおり日本にずっと暮らすかどうかはその人たちの判断によりますが、その気になれば日本でずっと暮らす権利を持っている人たち、これが「永住者」です。さらに、「定住者」、「日本人の配偶者等」という、比較的安定的な、日本で自由に働ける在留資格を持つ人たちが、合計して65%、つまり約3人に2人という状態です。日本の政府は「移民を受け入れる」という言葉を決して使いませんが、実態としては、この20年間、日本は移民をかなり受け入れてきて、今その第2世代たちがこの国で育ち、もうじきどんどん社会に出て行く、そういう状況に今立ち至っております。

次に浜松の状況をご覧くださいますと、スライドの赤のグラフが外国人登録者の総数です。2008年、2009年をピークに急激に下がっている様子がお分かりいただけだと思います。青のグラフで示されたブラジル人の減少が大きいこともお分かりいただけます。実は、ここ数年でブラジル人は、全国で32万人から19万人に、約13万人減少しました。けれども、残っている人たちの多くは、日本で暮らすことをかなり強く意識して残っているわけです。例えば、日本の大学で学ぶブラジル人の数はどうでしょうか。ご覧いただいているスライドの表は、私どもの大学に入ってきたブラジル籍の学生数です。最初に入学したのは2006年で、その年の入学者数は1人でした。2008年、デザイン学部で2人。しばらく間が空きましたが、現在在籍するブラジル人学生は3年生に2人、現在の2年生に4人、そして1年生に4人となっています。これらの学生はすべて日本人学生と全く同じ入学試験を突破して入ってきております。別の言い方をすると、外国人枠があって入ってきているわけではないわけです。

この中でも特にここ数年の動きを見てみますと、入学したブラジル人学生たちは、情報の発信にとて

も熱心で、自分たちの考えを積極的に発信するようになってきました。例えば、2013年2月に行われた「はままつグローバルフェア」のあるイベントのちらしをご覧ください。6人の発表者のうち、2人が本学の学生でありますし、さらに、そのうちの一人に至っては、英語も非常によくできて、このあとイギリスにさらに留学するというような学生です。

グローバルフェアでは、そういった学生たちが、自分たちの半生を振り返り、そして、これからのことについて強い意見を述べました。本学に在籍する2人は、「同じ境遇の子たちを支えたい」ということを力強く述べたわけであります。

しかし、子どもたち、そして保護者たちには大きな課題もあります。今見ていただいた、例えばブラジルの子どもたちは、国境を越えた移動をしております。異なる文化、生活環境で暮らしていて、将来がとても不確実です。日本で永住ビザを持っていても、経済的な状況の変化によってはブラジルに帰らなければいけないかもしれない。そういう不安の中にいます。母語でのサポートやカウンセリング、一人一人の状況の把握、そして居場所づくりや心のケアが求められています。

保護者に関しても、仕事が忙しくなかなか子どもと向き合う時間をとるのが難しいです。また、保護者の世代、つまり、移住第1世代は、ブラジルで教育を受けていますので、日本の教育制度のことをよく知りません。あるいは、給食とか遠足といったものの具体的なイメージを保護者は持っていないわけです。学校の先生方とのあいだには言葉の壁もあります。教育委員会などでは、翻訳の資料を作ったり、面談、あるいは家庭訪問、そのほかきめ細かな情報提供をしていますが、それはどうしても活字ベースで、少なくとも子どもたち自身が日本での学校の学びに前向きな気持ちを持つような資料はこれまで全くありませんでした。

今ご覧いただいているのは、本学を卒業し、具体的な企業名は申し上げませんが、浜松を代表する有名な輸送機器メーカーでデザイナーとして現在働いている卒業生による卒業制作の作品です。「エスコーラ・ジャポン・イン・ハママツ」（浜松における日本の学校）と題されたこの絵本は、彼女自身が、日本の学校に編入した経験を基に、日本の学校で子どもたちがどんなことに直面するか、給食とか、家庭訪問とか、そういったものについて絵を入れて説明しているものです。

今ここでは給食の場面だけ取り上げてご紹介します。ブラジル人の児童向けに入学のガイダンス絵本として作ったのですが、とてもタッチのやわらかい絵で、これは作者の金城ジゼレさん自身が描いたものです。ポルトガル語と日本語が併記されています。持ち物の説明などもかなり丁寧に書いてあります。これを見て、子どもたち自身が日本の小学校で学ぶことが楽しみになるように、という思いを込めて作られたわけであります。

ところが、絵本というのは「モノ」ですから、できただけでは子どもたちの手に届かない。そこで、今年度、私どもの大学では面白いプロジェクトを進めているところです。それに先だって、ちょっと一つ紹介させていただきたいのは、「多文化子ども教育フォーラム」という機会です。これは昨年度から私どもの大学で立ち上げたもので、外国につながる子どもたちの教育に関心を持つ方々、学校の先生もOK、支援員で入っているブラジル人当事者もOK、日本語を教えている方々もOK、行政の方もOKという、いろいろな人が集まるプラットフォームとしての役割を果たしています。昨年度は4回やりました。今年度、来週6月22日に第5回を開催します。「教育支援策をめぐって当事者学生が物を申す」という、いささか挑戦的なタイトルですが、日本の教育機関で学んだ本学の外国人学生たちが、自分の経験を基に、こういうふうな教育がなされるとすごくうれしいな、という思いをまとめているところです。そこでもやはり、スライドに映っているような学生たちが熱心に議論をしてくれました。

回り道をしましたが、これが皆さんに今日お示ししたい一番のポイントです。今年度、私どもの大学では、「文化・芸術研究センター長特別研究」という予算の枠で、「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」を行っています。本日の司会を務めている林先生もそのメンバーに入ってくれています。幾つかあるプロジェクトのうち、一つが、まさにこのポルトガル語と日本語のバイリンガルUD絵本を子どもたちと家庭に届けたい、そして、届けた先に本学のブラジル人学生たちがお邪魔して、話を聞きたい、というプロジェクトです。7月までに印刷し、夏休み明けの9月から編入してくる子どもたちに配付します。また、10月には、浜松市教育委員会が新年度に小学校に入ってくる子どもたち向けの説明会を行います。そこでも配付する予定です。教員チームは学校を回って、「この絵本の反応はどうですか」ということを聞きます。

しかし、最も大事なことは家庭でのヒアリングです。学校から紹介を受けてブラジル人のご家庭に入り込んでお話を聞く。それを本学のブラジル人学生、先ほどのフォーラムで、「物申す」として意見をまとめてくれているブラジル人学生たちに回してもらおうと思っています。つまり、本学のデザイン学部を卒業したブラジル人卒業生が作ったバイリンガルユニバーサルデザイン絵本を、本学に現在在籍するブラジル人学生が、小学校で学ぶブラジル人の子どもたちに、いわば「思いのバトン」として届けたい、こういうプロジェクトです。

親御さんにしてみれば、日本の学校のことが分からない、不安でいっぱいです。子どもたちも新しい環境が不安です。そこに、日本の学校で学び、今、自分自身が大学生になっているブラジル人学生たちが直接赴いて、日本の学校のこと、日本の学びのこと、そして日本での将来のことについて直接話を伝える。いわば、ロールモデル（役割モデル）のデリバリーをするわけです。その、今の小学生の保護者と今の大学生をつなぐツールが、ブラジル人卒業生がつくった、このユニバーサルデザイン絵本です。こういうかたちで、思いを次の世代につなげていくようなプロジェクトを進めたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

## 報告 4

### 「絵本と社会学：大学授業における絵本利用の事例」

森俊太氏（静岡文化芸術大学教授）

森 こんにちは。私は、静岡文化芸術大学文化政策学科の森と申します。今日は、「絵本と社会学：大学授業における絵本利用の事例」ということでお話しさせていただきます。私はこの大学で幾つかの授業を担当していて、「現代社会と人権」、「社会変動」という授業も担当しておりますので、主にその二つの授業でどうやって絵本を使っているかという話をしたいと思います。

絵本の特徴としては、これは一般的な話ですが、絵があることで視覚的なイメージが強いということです。あとは、やっぱり物語なので、物語性の効果というか、われわれはお話があると非常に納得するところがあります。その二つが特徴かなと思います。その二つがあるために、訴えかける力が非常に強いわけです。

その反面、訴えかける力が強いために、ステレオタイプといいますか、紋切り型のイメージを読んだ人に伝えてしまう。具体的には、ジェンダーや、(ジェンダーというのは、固定的性別役割概念といいますか、「男はこうでなくてはいけない、女はこうでなくてはいけない」と言うような考え方ですが)、あと、人種、民族についてのイメージ、つまり、「日本人はこんな感じだ」とか、「イタリア人はこんな感じだ」とか、先ほどありましたが、日系ブラジル人が浜松、静岡には多いのですが、「ラテン系のアメリカ人はこうだ」とか、そういう先入観があるわけです。そして、絵本を読むことによって、そういったステレオタイプがすり込まれやすいところがあると思います。特に絵本は子どもが読む場合が多いので、子どもにそういったステレオタイプがすり込まれてしまうと、大人になってもそれから抜け出すことが難しいといったことがあるのではないのでしょうか。

絵本と社会学の接点ということですが、先ほどの絵本の特徴を受けて、私は幾つか接点があると思ひまして、今日は次の五つの面をお話ししたいと思います。

一つは、社会学の中でも社会変化ということを取り上げますが、人口が増えて都市がどんどん大きくなっていく「都市化」という一つの変化がありますし、他には「少子高齢化等」があります。

あとは、「人種や性別」、「ジェンダー」意識もあると思います。そして、中間層とか、上層階級、下層階級という「階層」。それらも社会学の重要なテーマです。

あとは、これは社会心理学的な話になるとは思いますが、「個々の自我、アイデンティティー」。最近、自己肯定感や、自尊心が低い子どもが多いとよく言われますが、そういった「自己肯定感」、「自尊心」も非常に重要なテーマです。

あとは、「ワーク・ライフ・バランス」。ワーク・ライフ・バランスというのは、「仕事と生活の調和」とも言えると思います。「多様化」は、「ダイバーシティ」という言い方をされる場合がありますよね。高齢化がスライドでは2回出てきますが、「高齢化」または「社会的包摂」。「社会的包摂」というのは、最初のプレゼンテーションでもありましたが、ソーシャル・インクルージョンを意味します。

最後に、「死生観」、「死別」ということも非常に重要なテーマです。こういった五つの点から話を進めていきたいなと思います。

具体的な本ですが、「都市化」というテーマで、バージニア・リー・バートン (Virginia Lee Burton) という人の『小さいおうち』という絵本は皆さんご存じだと思いますが、私も実は好きで、子どもにも読ませたり、自分でも読んだことがあります。これは都市化の典型的な本かなと思います。

数枚、私が勝手にデジカメで撮ったのですが、小さなおうちが静かな田舎の丘に建っていて、家族がいて幸せに暮らしていた。ただ、自動車を通るような道路がつくられてしまっていて、遠くのほうからおうちがどんどん増えてくる。いつの間にか、低層住宅といいますか、4階建て、5階建ての建物、アパートというかマンションというか、公団住宅というかが、どんどん増えてきて、小さなおうちはその谷間に埋まってしまう。そのうち遠くのほうに高層ビルが建ってきて、路面電車が走る。高架電車が走って、地下鉄がどんどんできてくる。最後は、高層ビルの谷間に小さなうちがあつて、誰も住まなくなって、窓も割れているし非常に悲しい状態ですが、実は、その子孫、孫の孫ぐらいの世代の人が、「これは昔先祖が住んでいたところだ」と見つけてくれて、「家もまだ丈夫なので引っ越しさせましょう」ということで、トラックに載せて引っ越しをさせるわけです。遠くのほうにまちが見えて、元の丘の上のようなどころを見つけて、そこにおうちを修復して建てて、また家族が住んで幸せに暮らしたとき、という話です。

これはある意味、都市化のプロセスを描いているわけで、都市化を如実に示している。本の著者のインタビューには、そんな意味はなかったと書いてありましたが、環境保護運動への影響といいますか、いき過ぎた都市化とか自然環境の破壊に対して、それはよくないというメッセージを発している、というところもあります。これは余計なことかもしれませんが、高架電車が走っているのは多分シカゴだと思います。シカゴはたまたまアメリカの社会学の発祥の地なので、都市化ということに対して批判的な、社会問題を扱ったものというふうにとらえられる絵本でもあります。

あとは、「人種と性」、「ジェンダーと階層」というテーマで語ることができる絵本が幾つかあると思います。一つは、ガース・ウイリアムズ (Garth Montgomery Williams) の『しろいうさぎとくろいうさぎ』という絵本があります。もう一つ紹介するのは、リチャード・スキャリー (Richard Scarry) の『スキャリーおじさんのにぎやかなビジータウン』という絵本があります。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』はこういう本です。黒いウサギと白いウサギがいて、仲良くいろいろ遊ぶ。黒いウサギが、白いウサギに、「好きなんだけれども、ずっと一緒にいられるかな」と(いつて)、不安な表情を時々するんですね。あるとき、お互いに強く、好きだという気持ちを持ってごらん、と行って、そういうふうにする。気持ちを通じ合わせて、じゃあ結婚しましょうということになって、結婚すればずっとずっと一緒にいられるねというシーンです。森の動物たちに祝福されて結婚式を挙げました。というところで終わります。

もう一つ先に紹介します。『スキャリーおじさんのにぎやかなビジータウン』という絵本は、動物がたくさん出てきて、まちのいろいろな仕事を動物がやっている。それを各ページで紹介しているという絵本です。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』に関しては、ある意味、人種間の結婚、異文化結婚、国際結婚みたいなかたちでとらえることもできると思います。または、この絵本は子どもが生まれたところは書いていないんですね。ということで、同性結婚という解釈もできるかなと私は思っております。日本では、同性結婚は法律等的にはまだ認められておりませんが、認められる傾向が、世界的にはあるのかなと思います。つまり、いわゆる異人種、異文化ということだけでなく、セクシュアリティという性的指向等を含む、それ以外の解釈もできるのではないかと思います。

『スキャリーおじさんのにぎやかなビジータウン』は、批判的な解釈もあり、例えば、ブタさんがブルーカラーの労働者になっていて、ウサギは患者で、それを見ているのがライオンとか、弱肉強食の動物の世界みたいなのが職業にも表れているということで、これはちょっとけしからんというような意見

もあります。(少し深読みしすぎかもしれませんが、常に、強い動物が威信の高い職業に描かれているわけでもありません。)

次は、「アイデンティティー、自己肯定感、自尊感情」ということで、事前に紹介されておりました、レオ・レオニ (Leo Lionni) の『ペツェッティーノ』という絵本があります。ご存じの方は多いと思いますが、右側にいるペツェッティーノという小さなオレンジ色が主人公です。自分はほかのキャラクターの単なる部品 (パーツ) じゃないかということで非常に悩んで、ある時、自分探しの旅に出て行って、ある岩だらけの島の上でつまずいて、粉々になってしまう。しかし、自分もやっぱりいろいろな部品からできている、ただ、小さくて一色のみでできているだけなんだ、ということを受容して、みんながいる島に帰って祝福されるというストーリーです。これは、自己肯定感、ありのままの自分でいいというメッセージかなと思います。

レオ・レオニさんは、皆さんもご存じだと思いますが、ネズミの本とかいろいろな本を書いているらしいです。大体同じようなメッセージで、自分はそのままで、ありのままの自分を受け入れることが大事だ、ということを行っていると思います。

それから発展させて、子どもを長い目で見守るといいますか、一人一人の個性を尊重するというメッセージもすごく強くあるなと思います。そして、その一人一人の個性を受け入れたうえで、仲間との共感、協力、共助がある。そんなメッセージを持った絵本がたくさんレオニさんによって書かれていて、教科書に載っている『スイミー』という魚の絵本も同じようなメッセージかなと思います。

「ワーク・ライフ・バランス、多様化、高齢化、社会的包摂」ということで、明日いらっしゃるとお聞きしておりますが、スズキコージさんの『やまのかいしゃ』という話と、『こどものとも』にあった「おじいさんのつるつるかぼちゃ」という話があります。

『やまのかいしゃ』という絵本は、ある意味、日本の会社のパロディーのようなものだと思います。どこかの山でのんびり、ほげたさんとほいさくくんが、それなりに頑張っているけれども、効率的に働いているという様子ではない。ただ、いろいろな人が個性を発揮して組織を活性化するという読み方もできると思いました。

『こどものとも』の「おじいさんのつるつるかぼちゃ」も、かぼちゃのつるがどんどん広がって行って、地域に住むお年寄りや病気の人とか、いわゆる「社会的に弱い立場にあると言われる人たち」と言えるかもしれませんが、その人たちをつないで、かぼちゃのスープを飲んだり、かぼちゃのケーキを食べたりして、地域社会が活性化していくみたいなメッセージを秘めた本です。

最後に、「死生観、死別」ということですが、『おじいちゃんがおばけになったわけ』という本と、有名な『100万回生きたねこ』、『葉っぱのフレディ』といった本が挙げられるかなと思います。

初めの本ですが、おじいちゃんが急に亡くなった。孫に別れを告げる余裕もなく、ぽっくり逝ってしまったのですが、亡くなった後に、おじいちゃんが孫の男の子の前に (怖くない生前の姿の) おばけになって出てくるんですね。その理由は、おじいちゃんが、「ありがとう」と言うことによってその気持ちをちゃんと孫に伝えたかったから、ということを表した絵本です。

もう一つは、ご存じだと思いますが、『100万回生きたねこ』という本です。最後に、本当に愛情を持って接することができる、愛する相手を見つけて、子ネコが生まれて、満足して亡くなりました、という本です。この本はやっぱり死生観に関してですが、近親者との死別とか、生きるとは何かとか、他人とのつながりと生きがいといったものを表していると思います。

最後に、「絵本で社会や文化を学ぶ可能性」についてですが、子ども時代の経験や記憶、感情を学生に

思い出させながら、もうちょっと難しい、社会や文化についての話を学ぶことができるということで非常に効果的だと思います。

あと、絵本というのは、学びのメディアとして、絵本を通じて学んだことについて振り返らせることができる。何をどのように知り、どんな知識が、その学生の人格形成とか、世界観とか、価値観に影響したかということ、もう一度振り返って客観的に検証させることもできるので、絵本は社会や社会心理の学びのツールとして便利というか、利用価値があると思います。

あとは、学生が親や教育者になったときに、最初に述べたような、絵本の影響や使い方の特性について理解することができる、というメリットがあると思います。ということで、絵本を使って私が授業をしている具体的な事例についてお話しさせていただきました。ありがとうございました。(拍手)

## 報告5 「創作者の立場から」

武田美穂氏（絵本作家）

武田 武田です。絵本を描いています。漫画みたいな絵で絵本を描いている作家で、絵本の王道をひた走っているわけでもなく、絵本学会の理事に去年からなったのですが、そこでも多分やや異端なので、私のしゃべることは、作家の代表的意見でもなく、絵本学会の総意でもないです。

今、すごく素敵なお話をいっぱい聞いて、UD、バリアフリーということも、2010年にユニバーサルデザインコンテストがありまして、、、。審査員の1人に加えていただいたときに初めて知りました。自分の頭の中にある絵本のカテゴリーと全く違うようなものが出てきて、、、。自分は紙をとじて本の形になったものが基本的に絵本だと思っていたので、いろいろびっくりして、刺激を受けたり、本当にこれは絵本の中に入るのだろうかとか思って、いろいろ今でも思い続けています。そんな感じで、作家の立場でお話をさせていただきます。

まず、自作の絵本を読ませていただきますね。たくさんしゃべるのが嫌なので絵本を読んで時間をとる？なーんて。すみません（笑）。絵本は、自分にとって、「めくる」ということがものすごく大事で、本当はスライドにすればいいのですが、あえてアナクロイ機械を用意していただいて、めくりながら本を読ませていただきます。

まずは、私が絵本作家としてご飯が食べられるようになった、『となりのせきのますだくん』を読みます。これは今回パンフレットのイメージキャラクターに採用していただいたので、それもちょっとうれしかったのと、あと、さっきの国境を越えた本の話がありましたが、これはフランス版にもなっています。日本版はこうやって(右開き)めくっていきますが、フランス版は(左開き)こんな感じ。表紙の色は、フランスは「バックは紫でいく」と言われて、「絶対嫌だ」みたいな、いろいろな紆余曲折があったのですが、なんとかできあがり、ほっとしています。では、「ますだくん」を読ませていただきます。

### 『となりのせきのますだくん』

あたし、今日、学校へ行けない気がする。だって、頭が痛い気がする。おなかが痛い気がする。熱があるような気がする。頭が痛くなればいいのに。おなかが痛くなればいいのに。熱が出ればいいのに。

ガチャ。公園へ遊びに行っちゃおうかな。「先生、みほちゃんがずる休みしま〜す」。

隣の席のますだくんは、机に線を引いて、「ここから出たらぶつぞ」ってにらむの。消しゴムのかすがはみ出したら、いすをけるの。

あたし、算数が嫌いな。2 + 1は右手だけでできるけど、9 + 3は両手を使っても難しい。「10 + 11はどうするんだよ」って、ますだくんが笑うの。「先生、みほちゃんは手を使ってま〜す」。

あたし、給食のシチューの赤いニンジンが嫌いな。鶏肉も嫌いな。でも、こっそり残すと、ますだくんが大きな声で、「いけないんだ〜」っていうの。「また残してる」。

あたし、体育の時間も苦手。縄跳びが苦手。かけっこが苦手。それなのに、ますだくんは得意。「へたくそ、へたくそ、へたくそ。どうしてもっていうなら教えてやってもいいぜ」、「いい、いじめるから」、「へたくそのくせにえげんなよなあ」。ゴン。



きのう、帰りの時間にけんかした。お誕生日にもらった、いいにおいのするピンクの鉛筆、気に入っていたのに、まさだくん折っちゃった。消しゴム投げたらびっくりしてた。それからにらんでいた。あわてて帰ったけど、今日学校へ行ったら、あたし、ぶたれるんだ。やだなあ。やだな、やだな、やだなあ。

ギー。「おっはよう〜」、「あれ〜、まさだくん、そんなところで何してるの?」、「別に」、ギー。ドキ。ギー。ドキドキ。ギー。ドキドキ。ギ、ギ、ギ、ドキドキ。ギ、ギ、ギ、ギ、ギー。「おい、ごめんよ」と言って、まさだくんがぶった。「帰りに足し算教えてやろっか」、「いい、いじめるから」。

特に障害があるとかいうことではないのですが、学校に行くのにやっぱりハードルの高い子どもたちがいっぱいいます。私もこのみほちゃんみたいに何もできない子だったので、すべてにおいて学校自体ハードルが高かったです。そういう意味では、さっき絵本の中にはもともとバリアフリー、UDの要素はあると言われましたが、それにすごく共感しました。

次は、わたし自慢の意味なし絵本。こんな絵本でもいいのか?みたいな、、、。

『ありんこぐんだん わははははははは』。ナンセンスというか、もっとふざけたものですが、子どもの、調子に乗りたい!という特性に乗っかりたいと、作りました。次々次々、エスカレーター式に調子に乗って行って、「うそー」「わあ、ありえねえ」って言われたくて作った本です。そういう意味の「for」ですね。

『ありんこぐんだん わははははははは』

ありんこぐんだん わははははははは。お砂糖こぼしちゃいけないよ。一粒だっていけないよ。なぜなら、なぜなら、どこからともなく、わははははははは。ぞろぞろ、ほらほら、ぞろぞろ、ぞろぞろ。ぞろぞろ、ほらほら。ほろほら、ぞろぞろ。ありんこぐんだんやってくる。わははははははは。野を越え、山越え、丘を越え、どこからともなくやってくる、ありんこぐんだんやってくる。お塩じゃ? だめだめ。こしょうじゃ? だめだめ。お砂糖こぼしたそのときに、やつらはかぎつけやってくる。どこにだってやってくる。ジャングルジムのてっぺんも、お風呂の中も、押し入れも、やつらはたちまちかぎつける。プリン。無人島にだってやってくる。助けて〜。お砂糖。きよろ、きよろ、にやり。

5、4、3、2、1、0、バシューーン。ピコン、ピコン。ピコン、ピコン。ピコン、ピコン。「こちら、宇宙飛行士けんたです。順調に月の周りを回っています。どうぞ」。

「了解」。ピー。「ただいまからおやつ時間なので、ちょっとお休みします。どうぞ」。

「了解」。ピー。おやつ袋、ぼろ、ざっ。

わははははははは。月だって、火星だって、どこだって、宇宙の果てまでやってくる。ありんこぐんだんやってきて、それからお砂糖をすっかりかき集め、頭の上に担いだら、ぞろぞろ、ほらほら。ぞろぞろ、ぞろぞろ、どこへともなく去っていく。お砂糖探して去っていく。わはははははははは。

僕のおやつ。おしまいです。(拍手)

さて、もう一つは、「for」の格好をしたナンセンス絵本です。「食育絵本」というふりして人を釣りつつ、中では自分でナンセンスとめくりをやってみた。あと、ちょっと音楽的な掛け声みたいなのをやり

たくて作りました。『オムライス・ヘイ!』。

本は、電子書籍とかと違うのは、こういうところ(見返し)とか、こういうところ(そで)とかに遊びができるのいいですね。あっこれ、すみません(見返し裏にサインの書き損じがちらり)サイン本の書き損じ、捨てがたくて使ってます。

『オムライス・ヘイ!』

オムライス、ヘイ、材料だ。まずは中身だ、ケチャップごはん。タマネギだ、ヘイ、鶏肉だ。炒めるぞ、へ、ヘイ。さあ、ごはん、おっと忘れたグリーンピース。にゆる、にゆる、にゆる、にゆる、ケチャップだ。いい色だ、ヘイ。次は卵だ、1人に二つ。ぐるぐるだ、ヘイ。卵を入れるぞ、じゅうじゅうだ。ここが肝心、さあ行くぞ。半熟だ。ごはんを入れるぞ、勝負だぞ。緊張だ。くるり。成功だ、ヘイ、天才だ。お皿に入れるぞ、さあいくぞ。集中だ。天才だ。ケチャップで星、オムライス・ヘイ、大成功。おしまいです。(拍手)

ありがとうございます。きちんとお話するのが苦手で、すみません。ますだくんに出てきたみほちゃんと同じように、本当に私はいろいろなことができなくて、ちいさなころからコンプレックスのかたまりでした。でも、そういうコンプレックスが、絵本を描くにあたって、すごいネタ? 基盤? 動機付け? になっているので、過去のコンプレックスにご飯を食べさせてもらってるような?(笑)コンプレックスも使いようだよ、財産だよ、と、そういう話を子どもたちにすると、「ぼくもいっぱい持ってる!」「わたしも!」とかって、お互い共感し合ったりします。(笑)

先ほどまでのお話とがらっと変わってしまったのですが、今日は、総括的に本の話をするということで、絵本というものを自分なりに考えると——私は、今みたいに、リズムとか、めくりとか、そういう感じのものを大切にしてお話をつくっています。

もともとアニメや映画にもとても影響を受けていますし、そっちでもよかったのではないかとよく言われますが、やっぱりものとしての絵本、さっき言ったように、表紙があつたり、手触りがあつたり、背があつたり、紙の質感、そんなもので、読んでいるうちに自分の癖がついたりしたときに、とても大事な友達みたいになっていく、そういう、ものとしての絵本に対して非常に愛情があるんです。

もちろん、例えば今、電子書籍がいろいろ台頭してきて、今は文章が多いのですが、そのうち、きっと絵本みたいなものも出るであろうと思います。使い勝手がいいというか、利便性、それから、拡大できたりするから、いろいろなものではバリアフリー絵本に通じるような役割もきっと果たしていくであろう、と。

ですが、機械に映されるということで、物体としての絵本の、背はどうしよう、見返しは、そでは? みたいな、そういう楽しさで作っている本とはまた別になってしまう。それは自分にとって重大な違いです。

めくるというのは、映像と比べても——あっ、うちは父が映像の作家で、監督をしたり、プロデューサーをしたりしていたので、実は映像一家なんですけど。絵本と映像の違い。自分が絵本を最初に素晴らしいと感じたのは、子どもの頃じゃなく 23-24 くらい、大人になってからです。次々とくり広げられる場面とか台詞を、映像の場合は「享受」するのに対して、絵本は自分の時間、リズムでめくっていく。私はさきほど、作家としてこういうリズムで作っているという感じで本を読みましたが、読者のかたはもっと違った、それぞれのリズムや時間で読んでくださればいい。

以前、大阪のかなり関西弁が入っている「ますだくん」や、山口の70歳ぐらいの読み手のコアな山口弁の「ますだくん」を聞いて、非常に目からうろこが落ちて、そのときに、「本というものは、自分はこうやって作るけれども、手に取ったときから読み手のものになる」ということを非常に感じました。そういう、一方的なものではないという面白さが本にはある。今、皆さんがいろいろ読書運動で読み聞かせをしていますが、どんなふうに自分の本がバリエーションをつけてもらえるか、こっそり見に行くのがすごく楽しみです。

あるいは、今、読書教育の中で、子どものがわに読みきかせさせたら楽しいのではないかと、自分の中へ一回取り込んだものを、自分なりのものにして人に伝えることができる。絵本はそういう非常に柔軟な媒体だと思っています。

さっき手話の方とお話をしたのですが、「絵本」は、手話ではこの組み合わせで表すそうです。「絵」、「本」、「描く」、(描いたものを)「開く」、ということで「絵本」。絵本の基本的な姿が表現されています。安曇野ちひろ美術館に行くと、巻物からずっと連綿と続いてきた絵と文章の組み合わせさったものとか見ることができます。江戸時代あたりになると、とじた絵本が出てきて、あついまと変わらない!と、感激。時代考証が違っていたらすみません。確かめるためには安曇野ちひろ美術館に行ってみてください(笑)。

話が戻って、さっきのユニバーサルデザイン絵本コンクール・2010年に参加させていただき、いろいろ驚きがありました。今日、装演してくださったかぐや姫のお話をそのときにはじめて見ましたが、これを絵本と言っていいものかということは疑問に思いつつ、本当に面白いアプローチだな!と思いました。今回の応募先品は低い年齢やアマチュアのかたの素敵な作品を見せていただきましたが、2010年は自分たちが装演しながら全国を回っている、その道ではプロと言うのでしょうか、そういう人たちの作品の創意工夫がすごく面白かったです。

私は、オノマトペといわれるいろいろな擬音とか、そういうものがすごく好きです。例えばUD絵本の中で、さっき先生がおっしゃった触る絵本は、めくっていったときに、ざらざら感とか、「おっ」という感じがあります。これは、私がめくったときに擬音で「ざっ」とやるような、ああいう役目も担っていたりして、なるほどと思いました。

あと、僭越ですが、、、ロービジョン。私の絵は線とはっきりした色なので、ロービジョン用の本が自分にもできるのかなという気持ちになったりもしています。今後、UD絵本とかいうのが絵本としてもっと認知されるためには、プロの人たちが入っていったほうがいいかなと。絵本はいろいろなカテゴリとかあって、きっと自分の絵本はここら辺に入るのかな、入れてもらえないかなとか思いながら、さっきお話を聞いていました。

ただ、自分的には、人に伝えるということはエンターテインメントしなければいけない、これは最低の基本であると思っています。いままだ特殊な絵本は選択肢が少ないです。読者はもっとたくさんの幅がある中で選ばせてあげたい。選ばれるように作り手はもっとエンターテインメントする。しのぎをけずる。いいものを作る。ですが今日、いろいろなバリアフリー絵本、UD絵本を見て、マーケットにのせるのはなかなか大変だと感じました。製作費の問題です。日本の政府はつまらないところにお金を使わず、こういうところにこそお金を出し、バックアップしなくてはいけないと切に思います。

私は以前、絵本学会に入る前に、講演をさせていただいたことがあるのですが、そのときにコーディネートをしてくださった広松由希子さんが、打ち合わせの時に私が「エンターテインメント」と馬鹿の一つ覚えみたいに言うことを面白がってください。講演の中で「武田さん、わたし辞書ひいてきまし

た！」と。『エンターテイン (Entertain)』という言葉があるんです。武田さんがよくエンターテインメントと言うけれども、「エンターテイン」というのはそもそも「もてなし」という意味。だから、武田さんは、やっぱり作り手側として子どもたちをもてなしたいんですね。そういう気持ちって素敵ですよ。」ということをおっしゃいました。私は、それをすごくすごく大事にこころの中に抱えて、事あるごとにエンターテインでいこうと思いつつながら本を作っています。ちょっとUDから離れてしまいましたが、作り手としての本の話をお聞かせいただきました。ありがとうございます。(拍手)

司会 ありがとうございます。

## 質疑応答・意見交換

司会 では、パネリストの方に壇上にお戻りいただいて、会場からパネリストの方に何かおたずねになりたいことや、あるいはご意見等があればそれを伺いまして、最後にパネリストお一人ずつからまとめをお話しいただきたいと思います。

竹内 横浜のフェリス女学院大学から来ました竹内と申します。池上先生のブラジル人学生の絵本のお話を大変興味深く拝聴しました。視点としてとても面白かったのですが、私は、そのプロジェクト自身——ブラジルの子どもたちのバトンということもすごく大事だと思いますが、そういうことが日本人学生に対してどういう影響を与えていくかというのもすごく大事ではないかなと思うんですね。ブラジル人卒業生や大学生の取り組みは、先生のゼミをはじめ日本人学生たちの、共生とか、そういうことに対する意識をどのように変えていったか、そこら辺をお話しただけならと思います。

池上 ご質問ありがとうございました。とてもよいご質問をいただいたことをうれしく思います。今日ご紹介したのは、今年度やっているプロジェクトの一部でありまして、実はほかにも、今年10月にある展示のプロジェクト(多文化共生に関連したコンテンツにポルトガル語と日本語のバイリンガルで説明を加えた展示会)を行います。その実行委員長はやはり日系ブラジル人の学生です。そこには日本人の学生も多々入っています。

また、私が持っている「多文化共生論」という授業の中で、彼女らがはままつグローバルフェアで話した15分ほどの映像を見せます。学生たちの反応——授業の最後にも書いてもらうペーパーは、「非常に感動した」というメッセージで満ちあふれていましたし、中には、実際にその場で感動の涙を流した学生もいました。私がおの翌週、学生たちに、こんな感想があったよと紹介したうちの1枚は、日本人のある学生の紙です。「彼女らの決意が胸に響きました。でも、同時に思った、負けられないぞ」と書いてあるんですね。

それをフィードバックして共有することで、普段はにこにこ笑っている仲間たちが、大変な苦勞をして今ここにいる、ということをもみんなで共有します。共有するだけで終わらずに、私どもの大学ではさらに、同じ仲間として展示のプロジェクトに加わるとか、学生支援のプロジェクトに加わるとか、そういう仕組みを幾つも持っています。それが相互に連携し合いながら、本学は、浜松にある公立大学の地域貢献の一つとして、多文化共生の取り組みを進めている、ということになっております。

司会 ほかに何かご質問、ご意見があれば挙手願います。

林 京都造形芸術大学の林絵美という者です。武田美穂さんに質問させていただきたいのですが、先ほど、エンターテイン(もてなす)を意識して制作しているとお話しされていましたが、もてなすということをもどのように意識されて制作されているのかをお聞きしたいです。

武田 ありがとうございます。「もてなす」と言ってしまいましたが、例えば作家は、書いているうちに、ターゲット年齢を意外とみんな持っています。大人の本は大人の本としてありますが、子どもの本の場合は、意外と細分化されていて、12歳ぐらいの人にあてて書くのが好きな人とか、なんかそれがある。

私なんかは、もっと小さいかたたち。すべての人たちが見られる絵本を最初から目指しているという方もいますが、私はどうしても子どもに向けて発信をしています。

ただ、その発信は、「子どもに向けて」といっても、70歳の人も心の中に7歳と8歳を持っているのです。そこら辺に呼応したいなと思っています。だから、自分の中の7歳、8歳が、皆さんの中にいる7歳、8歳にどう呼応して、どう面白がってもらえるかとか、なんかそういうようなことをすごく考えながらやっています。

私は絵本作家になる前に図書館でアルバイトをしていて、ある日、『よあけ』という本の読み聞かせをさせられました。それが淡々とした暗い映像で、朝になると突然緑の画面になる。そのときに、すごいめくる映像技術に感激して、「私、これ絶対やる」と思いました。今、自分で何を言おうとしているのかわからなくなっていました(笑)。すみません。皆さんをもてなそうと思って、めくりをやろうと思っています。あとでちゃんと話がまとまったら言いに行きます。すみません。

林 ありがとうございます。

瀬戸口 こんにちは、九州産業大学の瀬戸口信悟といます。さっきちょっとデジタル絵本の話が出ました。バリアフリーとかUD絵本の話も出ました。僕もデジタル絵本のことを考えることがあって、デジタル絵本についての可能性を皆さんに聞きたい。どういう可能性がデジタル絵本に見られるか。

僕の意見としては、本を読んだのですが、難聴の障害を持った両親から生まれた五体満足な健康な子が、絵本の読み聞かせとか足りなくて、コミュニケーション能力が低く、閉鎖的な性格になってしまった。そういうのは、デジタル絵本とかで、声も出るし改善されるのではないかなという可能性が僕には見られて、バリアフリー絵本とか、ユニバーサルデザイン絵本とかにおいて、とてもいいのではないかなという考えを持っています。何かそれについてどういうお考えをお持ちなのか。

司会 今回の大きなテーマになると思います。攪上先生からお一人ずつ簡単に、こういう可能性があるのではないかと、あるいは、こういう問題もあるのではないかとということを、今、お考えになっていることで結構ですのでお話しただけないでしょうか。

攪上 私がかかわっている分野でも、電子絵本というか、ITを使った絵本の進出がすごくあって、ユニバーサルデザイン性はやはりすごくあると思っています。特に、視覚的なもので情報が得られないような障害というか、そういうような人たちにとっては情報障害も起きますので、そういうものに対しては非常に力があると考えています。絵本に関しては、障害にマルチに対応する絵本として、マルチメディアデジという取り組みが今あります。

私の中では、電子絵本というのは、まだまだどうなっていくのか整理がついていないところもあります。情報を届けるという点でのユニバーサルデザイン性はすごくあると思いますが、武田先生がしきりに皆さんに訴えていた、絵本が持つ、人との関係を紡いでいくような面とか、ものと触れていくような、もっと五感全体に訴えてくるようなものの中にあるものは、電子絵本の中ではどういうふうになっていくのかというのは、まだちょっと自分の中でも整理しきれないでいますが、ユニバーサルデザイン性という一つの方向としては、非常に力を発揮していくということはあるかなと考えています。

古瀬 テキストなり絵が、データとして使われているかたちに取りあえず収納されている。それを受け取る側が自分の使える能力に応じて取り出すことは、可能性としてはある。普通に印刷された絵本であれば、視覚的に情報をとれない場合は困難、というのがありますが、インターフェースをうまくつくればそれを乗り越えられるであろう。現在は、インターフェース——情報を与えるというかたちは、完全にほかの手段としてはまだできてないと思いますが、多様なものが出てくれば、今まで以上に楽しめる、楽しめなかった人がもっとずっと減ることになるということだけは言えます。具体的にどういうふうに展開するかというのは、私はそういう技術を開発している立場ではないので分かりませんが、データが使えるようになっているということは非常に有望な段階だ、というふうには申し上げます。

池上 私自身は、絵本という媒体を通じて、生身の人間同士が対峙する、つまり一つの時間と空間を過ごすことがとても大事であろうという考え方を持っています。ですから、デジタル絵本で、今おっしゃられたことを、例えば生身の人間が何らかのサポートをする仕組みをつくることも重要ではないか、というのが考え方の大前提になります。そのうえで、デジタル化することのメリットを、今日の私の発表との兼ね合いで多言語化という観点からちょっと考えてみたいと思います。

浜松市では、さまざまな外国人に向けて多言語情報を発信していきまして、その中には、カナル・ハママツ——カナルというのは水路ですあるいはチャンネルという意味です——という動画サイトも含めた多言語情報の提供があります。ユーチューブにリンクが張ってあって、例えば中国語の説明で見ることができるとし、ポルトガル語での説明もあります。映像は全く同じですが、言語が違うものをおかぶせてあります。

例えば、同じ絵本に対して、中国語を選ぶと中国語の音声が出てくる。ポルトガル語であればポルトガル語、そういう対応がデジタル化は非常にやりやすいのかなと、お聞きしながら思いました。直接の回答ではないですが、関連した情報としてお伝えした次第です。

森 私も直接デジタル化というのはよく分からないのですが、IT技術と絵本に関しては、私は単身赴任みたいなことをしていたことがあります——小さい子どもが日本にいて、私は仕事でほかの国ということがあったのですが、その時、私が絵本を読んだのをカメラで写して、ユーチューブにのせて、とか、動画をファイルにして、それを子どもに送って、子どもは私が絵本を読んでいるのを見られる、というようなことで使いました。そういう意味では、デジタル絵本ではないですが、テクノロジーを利用して、遠い距離でも親子のコミュニケーションを保つ、という工夫はしたことがあります。

武田 デジタル絵本、でも、分けて考えればいい。デジタル絵本にできること、普通の本にできること、それを組み合わせてできること。共存共栄みたいなことが望ましいと思います。

ただ、本でも、デジタルでも、何でも、読んだ人が面白くなかったら、本を読むことを嫌いになってしまったらいけない。だから、そこら辺は、本当に頑張って、頑張って、いいものをいっぱい作っていかなくてはならないなとすごく思います。

それから、さっきの続きですが、図書館にかぎっ子がいっぱいいて、4年生の女の子がその主でした。私のところに、「本、読め」と持ってくる。「感情がこもってない」とか、「へたくそ」とか言われながらいつも本を読んでいました。

で、新刊が来て、読めと言われて読んでも、何ページかで、つまらないと「もういいよ」と書架に返しに行ってしまうのです。大きな責任を感じたりしました。「あの本はいいのに私の読み方が」とか。あらゆる意味で、本を子どもたちに伝えようという人たちは本当に頑張らなければいけない。いまだにその子の顔が目に浮かんだりして、「閉じられない絵本を作りたい」みたいな、さっきのはそういう話でした。すみません。

司会 ありがとうございます。まだまだ皆さんお感じになっていること、お聞きになりたいことがあると思いますが、時間がまいりました。明日のラウンドテーブルでは、「ユニバーサルデザイン絵本」ということで、攪上先生と武田美穂先生においでいただきます。また、「ものとしての絵本」ということで、京都造形芸術大学の佐藤先生のコーディネートのもと、アーティストの藤本由紀夫さん、そして、本学のデザイン学部生産造形学科の佐井国夫教授が話題提供者として入りますので、ぜひ今日の話を発展させていただければと思います。

最後に一言ずつ、パネリストの方から、何か本日の感想等をお聞かせいただいて終わりにしたいと思います。

攪上 今日はありがとうございました。いろいろなお話を聞いて、自分の中でいっぱいいっぱいですが、絵本が向ける眼差しの中に自分が入っている、そういうことが人に与える力というか、共に生きていくことのうれしさが、絵本を通してもっともっと広がっていくといいかなと改めて思いました。

古瀬 私の専門は建築、まちづくり、ユニバーサルデザインですが、まちづくりの絵本はけっこう前から作られていますが、ユニバーサルデザインの中身をメッセージとして伝えるのに的確な絵本は、まだ十分に世の中に出回っているとは言えない状況なので、なんとかそれをしたいなとちょっとは考えつつ、でもいまだに手がついてない、なんとかしようこの場で考えました。

池上 私は、先ほどいただいた質問のあと少し考えたことを、補足的に語って終わりにしたいと思います。今日、私の発表では、本学のブラジル学生が卒業制作で作ったバイリンガル絵本が、思いのバトンとして使えるのではないかという話をしました。ブラジル人の小学生やその保護者にとってみれば、そのバトンを持って自分の家にやってくる大学生たちはまさに大学進学を果たしたロールモデルであり、そのロールモデルに直接接する機会になるというメリットがあります。

そして、当事者の外国人学生たちにとってみれば、自分たちの持って生まれた境遇は、決してこの国で生きるうえでのデメリットではなくて、いろいろな人たちをつないでいくことのできる資質なのだという認識を持つ、いわばエンパワーメントの機会になるのではないか、という考えを持っています。

日本人の学生や日本の社会にとってみれば、今、日本の社会では、移住第2世代という新しい人たちがどんどん高等教育を受けて社会にはばたこうとしている、そういう状況だということを知ってもらう機会になるだろうと思っています。

1冊の絵本ができることは小さいですが、今申し上げたような大きな認識の変革につながるような、そういうきっかけになっていけば素晴らしいなと思って本日の私の発表とさせていただきます。ありがとうございました。



森 ちょっとあえて挑戦的なことを言わせてもらおうと、私も絵本は大好きで、子どもにも読んで聞かせたりします。絵本に限らず、本は非常に重要なことだと思うんですね。ただ、そういうものだからこそ、絵本は必ず好きにならなくてはいけないとか、絵本が嫌いな、または本が嫌いな子どもは駄目だみたいな、そういうふうになんとか思ってしまうような傾向があるような気がするんですね。

本は重要ですが、嫌いな子もいる。嫌いだからといって別に悪いわけではない。絵本学会は絵本が好きな人がたくさん集まる会ですが、嫌いでもいいんだということを、ちょっと心の片隅に置いていただければなと思います。

デジタル化が、本が嫌いな子、彼ら、彼女らが好きになるような、何かそういう役割を果たしてくれるといいのかなと思います。

武田 今のはすごくいい意見だと思います。私には弟がいて、全然本を読まなかったのですが、今、私よりもずっと立派な社会人になっているので、別に本を読まなくても全然かまわないかなとか思います。

本当は、今日、私はいろいろ質問を振ったりして橋渡しの役をするつもりでした。今日は、(皆さん)魅力的で面白いお話でしたが、難しいことも多く、質問ができなくて、橋渡しができずにすみませんでした。

ランドテーブルでは、すごく身近な感じで皆さんとお話をしたいと思いますので、できれば明日ご参加くださいますよう、よろしく願いいたします。

司会 まだまだ皆さんお聞きになりたいこともあると思いますが、このあとの予定もありますので、申し訳ありません、ここでシンポジウムを終了させていただきます。

なお、このあと、部屋を出たところで武田美穂先生の絵本の販売等、サイン会を行いますので、ぜひお越しください。

最後にちょっとだけ宣伝させていただきますと、ユニバーサルデザイン絵本コンクールは今年度も行います。皆さんのお手元の袋の中に絵本コンクールのちらしが入っているかと思います。9月30日締め切りですので、ぜひご応募いただきますようお願いいたします。では、長いあいだ、ありがとうございました。(拍手)